かたの あしたの がっこう 講演会

講演会
2019 年 10 月 6 日（日）
13:30 ～ 16:00
ゆうゆうセンター
参加者 170 名

市長あいさつ

新たな取り組みである小中一貫校は、これまでの教育行政の経験だけではなく、新しい経験も必要です。また、学校環境が変わることに対する不安も理解しています。これらを解消するために、保護者、地域の方々と一緒に新しい学校をつくっていきたいと考えています。

黒田市長

教育長あいさつ

学校は地域やまちの誇り。今、交野市としてはじめての施設一体型小中一貫校建設に向け動いています。子どもたちにとっても、保護者・地域の方々にとっても、教職員にとっても、一生に一度あるかないかの新校づくりです。みんなの力でいいものにしたいと切望します。

北田教育長

講演会

前半は 3 名の講師の方々にご講演いただきました。

岩佐 武司 学園長（凌風学園京都市立凌風小中学校）
凌風学園の小中一貫校の成果については、発達段階に応じた学習指導ができることで、子どもたちが落ち着いて学習に集中し、学習規律の定着や学力の向上につながったこと。4・3・2 の 3 ステージ制による繋がりの中で、下級生は上級生へのあこがれを抱き、上級生は下級生へのよき手本となることの意識が生まれ、自己有用感の向上が図られたことなどがあげられる。

横山 俊祐 教授（大阪市立大学大学院工学研究科）
小中一貫校の本質が 3 つある。1 つめは多様性を生むこと。小中が合わさることによって、ヒト・モノ・コトが多様化する。2 つめは関係性を生むこと。関係をつくっていくことで新たな活動を生み出せて、関わる人の意識も変わる。3 つめは段階性。発達段階に応じた環境・学びを得ることができる。

山崎 亮 氏（株式会社 studio-L 代表・コミュニティデザイナー）
地域の人たちが、学校ができ上った後に関わるのではなく、学校をつくっている段階から関わってもらうことが大事。地域住民もせっかく関わるのであれば、学ぶことが大事。学校との向き合い方が変わる。子どもも大人も学校で学びながら関われたほうがいい。でき上ったあとは、みんなで活用できるような学校になるといい。

トークセッション

「これからの教育、これからの学校、これからの地域コミュニティ」

後半は、3 名の講師の方々に加え、地域協議会委員の奥野さま、北田教育長にご登壇いただき、現在進めている第一中学校区における施設一体型小中一貫校について、ご対談いただきました。

● 3 人の講師の方のお話を聞いた感想は？

北田教育長：先生のお話を聞いて、昔のことがとても重要になってきているように感じた。私の子どもの時、中学校に塀はなくどこからでも入れたが、必ず門を通る習慣があった。そんな経験が人を育てていく。昔のような環境を取り戻すことできる新しい学校を目指したい。

奥野氏：昔は神社に行ったときに幅広い世代の子どもたちがいた。喧嘩もあったが、下の子に対する思いやりもあった。その上下関係から、あこがれを持つこともあった。先輩、後輩の「風通しのいい環境づくり」を目指したい。

岩佐氏：1 年生から 6 年生は集団登校をしている。毎年、4 月にその編成が変わる。7 年生になると集団登校に参加しなくてもよくなるのだが、しばらくの間集団登校に加わり、下級生をサポートしてくれる。自然とそのような行動が起きているのが、小中一貫校の良さだと感じる。

横山氏：中学校の設計をしたときに、「学年は別々の階にしてほしい」という要望があった。「不良がうつる」という感覚があったようだ。しかし、小中一貫校は全くその逆になる。上級生と下級生同じ校舎にいることで、尊敬や思いやりが生まれることにつながる。意図的に交流が生まれるということを仕掛けていくことが大切。

山崎氏：懐古的に考えることは必要ではあるが、昔と今はその背景が違うことを認識しておかないといけない。昔、スマホはなかったし、インターネットもなかった。昔はよかっただけではなく、意図的に何かを仕組んでいかないとうまくいかない。「昔はよかった」の哲学を現代的にうまく組み合わせていく必要がある。

●第一中学校区における小中一貫校に期待することは？

北田教育長：校舎は新しくなるが、見た目だけではなく、子どもや地域に対する考え方も新しくしていく必要がある。困難に対面した子どもたちが、柔軟な発想で対応していくことが必要だろう。また、大人の支援が大切。以前は、強い言葉で指導すれば、それをばねにということもあったが、今は寄り添う形で子どもたちを支えてあげることが求められる。

岩佐氏：小中一貫校では、「どういう子どもを育てたいか」という視点は大事。まずはその思いを学校と地域が共有する必要がある。学校は、地域の人に対して期待し、任せて、認める、を続けていくも大切。そうすれば、地域の人の協力も得られるようになる。地域の人にクラブ活動での指導や見守りなど積極的に関わってもらうことができれば、子どもたちにも地域を思いやる心が育まれる。

横山氏：新しい学校をつくるときに学校は地域性を踏まえた個性を出していくことが大切。地域性のなかでとても大事なのは人。住んでいる人たちに自由に話してもらいながら、要素を学校計画に組み入れていくことが必要。
もう一つ大切なのは子どもの視点。大人の理屈ではなく、子ども目線の理想を実現することが大切。子どもの感性を取り入れながら考えていくと、楽しい学校になってくる。

山崎氏：子どもたちが民主主義を練習する場が少ない。学校を社会と捉えて、民主主義を練習しながら社会に出ていけるような場にしていくべきだろう。
偏差値だけを追い求めていく学校は危険。AI が発達してくる未来は、全員が偏差値だけを追い求める時代ではない。まずはそのことを大人たちがしっかり学んでいかないといけないし、その時の空間や方法を考えていくべきだろう。

●最後に今後の展望は？

奥野氏：教育長や学校関係者が熱心に取り組んでいるこの取り組みは、ぜひ多くの人たちに発信してほしい。
私部地域では、防災や防犯、食育事業、祭りを通じて、子どもたちとの接点が多い。また、学校周辺の地権者の方も協力してくれている。たくさんの人が協力しながら、地域と学校が連携した新しい学校にとても期待している。

北田教育長：交野は結婚してから交野に戻ってくる人が非常に多い。これは、これまで教職員や地域の方が愛情をもって子どもたちを育ててきた結果ではないかと感じている。
成績が一番の学校を目指すのではなく、子どもたちにとって、次に何をしていくべきかを考えていく姿勢を常に持っておきたいと思う。地域の方々にも協力していただきながら、いい学校、「あしたのがっこう」をつくっていきたい。

参加者の感想

・施設一体型の小中一貫教育のハード面、ソフト面の両面にわたる理解が深められました。
・ これからの学校教育・地域での社会教育のあるべき形が分かったような気がした。
・交野の学校づくりに参加しようという思いが強くなった。

製作：studio-L
発行：交野市教育委員会事務局
学校規模適正化室
〒576-0052
私部 2 丁目 29 番 1 号